

## ねぎのネギアザミウマの被害が急増

～ 防除を徹底し被害を防止しましょう ～

### 1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

8月1半旬に行ったねぎ（秋冬どり）の巡回調査（全県10地点）の結果、アザミウマの被害株率は68.0%（平年27.5%）と高く、前回調査（7月4半旬）から急増した（図-1）。

8月8日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、東北日本海側の気温は高いと予報されている。

以上のことから、今後もネギアザミウマの発生密度が高まり、被害（図-2）がさらに増加することが懸念される。

### 2. 防除対策

- 1) 発生源となるほ場周辺及びほ場内の雑草除去に努める。
- 2) 多発すると防除が困難になるため、初期防除に努める。多発しているほ場では、表土中の蛹からの羽化や葉肉内の卵のふ化により、薬剤による防除後も発生密度が低下しない場合があるため、7～10日間隔で2～3回薬剤を散布する（表-1）。

また、薬剤を使用する際は、薬剤感受性の低下を回避するため、同一薬剤、同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤をローテーションして使用する。

- 3) 薬液には展着剤を必ず加用し、葉先から株元まで薬液が十分付着するように畝の両側から丁寧に散布する。

### 3. 資料

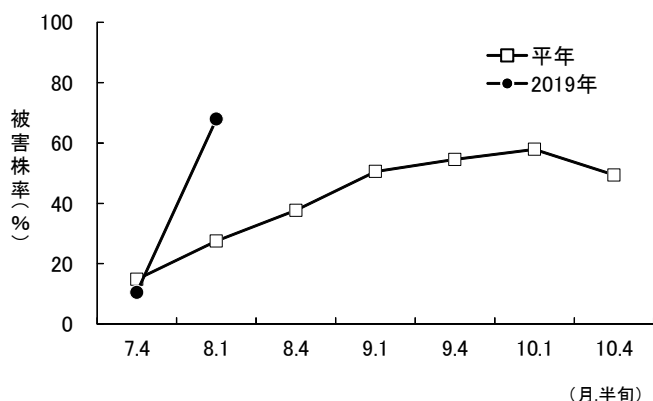


図-1 巡回調査における被害株率の推移（秋冬どり）



図-2 被害葉

表-1 ネギアザミウマの防除薬剤

系統	農薬名	希釈倍数 [散布液量]	使用時期	使用回数	各成分の総使用回数
a	ダイアジノン乳剤40	700～1,200倍 [100～300L/10a]	収穫21日前まで	2回以内	2回以内
	マラソン乳剤	2,000～3,000倍 [100～300L/10a]	収穫7日前まで	6回以内	6回以内
c	アグロスリン乳剤	2,000倍 [100～300L/10a]	収穫7日前まで	5回以内	5回以内
	アディオソ乳剤	3,000倍 [100～300L/10a]	収穫7日前まで	3回以内	3回以内
d	リーフガード顆粒水和剤	1,500倍 [100～300L/10a]	収穫7日前まで	2回以内	2回以内
g	アドマイヤー顆粒水和剤	5,000倍 [100～300L/10a]	収穫14日前まで	2回以内	ア
	アドマイヤーフロアブル	2,000～4,000倍 [100～300L/10a]			
	アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍 [100～300L/10a]	収穫3日前まで	2回以内	4回以内 <sup>※1</sup>
j	スタークル顆粒水溶剤	2,000～4,000倍 [100～300L/10a]	収穫3日前まで	4回以内	イ
	ダントツ水溶剤				
	モスピラン顆粒水溶剤	2,000倍 [100～300L/10a]	収穫7日前まで	3回以内	3回以内 <sup>※2</sup>
	スピノエース顆粒水和剤	2,500～5,000倍 [100～300L/10a]	収穫3日前まで	3回以内	3回以内
1	ディアナSC	2,500～5,000倍 [100～300L/10a]	収穫前日まで	2回以内	2回以内
	ファインセーブフロアブル	1,000～2,000倍 [100～300L/10a]	収穫3日前まで	2回以内	2回以内
W/1	ハチハチ乳剤	1,000倍 [100～300L/10a]	収穫7日前まで	2回以内	2回以内

a: 有機リン剤、c: 合成ピレスロイド剤、d: ネライストキシン剤、g: ネオニコチノイド剤、j: マクロライド系剤、1: その他

W: その他の殺菌剤

※1: は種時の土壌混和、育苗トレイの灌漑及び定植時の株元散布は合計1回以内、生育期の株元灌漑は1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内

※2: は種時の土壌混和は1回以内、植付時の土壌混和及び定植当日までの株元散布は合計1回以内

ア: イミダクロプリド（3回以内（定植時までの処理は1回以内、散布は2回以内））

イ: クロチアニジン（4回以内（定植時までの処理は1回以内））

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660  
 秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326  
 掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>